

***** レベッカ・ブラウン講演会 *****

2009年5月17日(日) / 午後3時—4時30分

東京大学本郷キャンパス 法文2号館1番大教室

司会・通訳: 柴田元幸 / 通訳: 望月進司

原稿構成: 鄭麗英・柴田元幸



レベッカ・ブラウン作品を時代順にたどる

柴田(以下S)——最初に、ブラウンさんの作品をご存じない方もいらっしゃるかもしれないので、これまで彼女が発表した作品を簡単に紹介します。ここ(背後のスクリーン)に本の表紙を映します。まずこれが、1984年に出た *The Evolution of Darkness* (闇の進化) という短篇集です。小さな出版社から出たんですけれども、ここに入っている短篇はそのあと他の作品集に入ったり、もっと大きな出版社から再版されたりしました。

レベッカ・ブラウン(以下B)——これはイギリスだけで出たんです。

S——そうですね。で、その次が1986年に出た最初の長篇 *The Haunted House* (幽

霊屋敷)で、これは3部に分かれた作品です。ごく簡単に言うと、第1部は父親の話、第2部は母親の話、第3部はパートナーとの話ということで、そのあとブラウンさんがくり返しお書きになる大事なテーマがここにみな入っていると書いてもいいかもしれません。その次が第2長篇で*The Children's Crusade* (子供十字軍)で、1989年に出版しました。この本が最も要約しにくくて、色んなエピソードが幻想的だったり、リアルだったりする作品です。だから下手な要約をするより、別のことを紹介すると、*The Publishing Triangle* というレズビアン・ゲイの作品を紹介している組織があるんですが、そのウェブサイトで、レズビアン・ゲイ小説ベスト100というのを選んでるんですけども、ブラウンさんの作品の中で選ばれているのがこの作品です。知ってました？

B—— うん、知ってます。

S—— その次に出たのが、*The Terrible Girls* (恐るべき女の子たち)という、1990年に出た作品集です。ここから、ブラウンさんの恋愛を書くときの主要なテーマである、恋愛関係にある2人のあいだで半ば必然的に生じてしまう権力関係とか、そういったことが色んな形で扱われるようになってるんじゃないかと思います。それから、これはほかの作品でもそうですが、彼女はポップカルチャーを非常におもしろい形で小説の中で扱うんですけども、この中でも“Dr. Frankenstein, I presume” (フランケンシュタイン博士ですね)というタイトルの短篇があって、Dr. Frankenstein はもちろんあのモンスターを作った博士のことですけども、I presume というのは、スタンリーからですね？

B—— そう、スタンリーとリヴィングストーン。

S—— “Dr. Livingstone, I presume” ですよ。行方知れずになっていた探検家のリヴィングストーン博士がアフリカで発見されたとき、発見者のジャーナリスト、ヘンリー・モートン・スタンリーが“Dr. Livingstone, I presume”と言った、という有名なエピソードがあります。このタイトルはそれをふまえているわけです。

で、これが90年に出て、その次が、1993年の作品集*Annie Oakley's Girl* (アニー・オークリーの女友だち、邦題『私たちがやったこと』)です。このアニー・オークリーというのは、僕の世代やそれ以上の方はご存知だと思いますけれども、『アニーよ、銃を取れ』という映画・ミュージカルを踏まえたタイトルです。*The Terrible Girls* で始まった愛のテーマというのがこの本ではさらに深まっていると思います。

だからこのあたりまでは、愛の関係をかなり幻想的なトーンで書く作家、そういう

イメージで少なくとも僕は見ていたわけですがけれども、その次に出たのがこれですね。*The Gifts of the Body* (邦題『体の贈り物』)、1994年。これには驚きました。そもそも小説と言っているのかどうかもちよっと迷うような、ほとんどノンフィクションではないかと思える、小説だとしたらそれまでの幻想的な雰囲気とは違って変わってリアリズム的な書き方で、エイズで死んでいく人たちをケアする人の経験をすごくストレートに綴っているように見える作品なんですね。もちろん、今までの小説との連続性も色々あるわけですが、まずは題材も書き方も違うので、とても驚いた記憶があります。日本ではこの作品から紹介されるかたちになりました。

その次に出たのが、この *What Keeps Me Here* (私をここにとどめるもの) というタイトルの作品集で、これが1996年。さっきの *Annie Oakley's Girl* の流れにも通じるものがあり、加えてグリム童話とかおとぎ話とか、そういうものを踏まえて書いた短篇もあったりして、そういう意味で新しい面が出ています。

で、その次が、これはつい先月に翻訳が出た *Dogs* (邦題『犬たち』) という、1998年発表の作品です。これについては日本で出たばかりということもあるので、あとでまた詳しく伺おうと思いますけれども、狭いアパートに女の子が住んでいて、そこに突然犬が現われて、それがどんどんどんどん増えていって、彼女はほとんどその犬たちの奴隷のような存在になるという、非常に幻想的な面もある作品です。

その次は本当にノンフィクションで、ブラウンさんのお母様が病気になって、それで彼女とお姉さんお兄さんとで介護して、お母様を看取った体験を綴った本です。*Excerpts from a Family Medical Dictionary* (家庭用医学百科からの抜粋、邦題『家庭の医学』) という題で、これが2001年ですね。最初に出た限定版ではインクも紙も手作りで、書物自体が芸術品でした。

それから2003年に、*The End of Youth* (若さの終わり、邦題『若かった日々』) という作品集で、今までの短篇が恋愛関係に焦点が合っていたとすると、これは自分の親との関係を振り返るといふか、総括するといふか、そういうタイプの話だと思います。だから“The End of Youth”というのは青春が終わったというより、親との関係にひとつけりがついたということのように思えます。

その次がアーティストとのコラボレーションです。*Woman in Ill-Fitting Wig* (鬘カウチの合っていない女) という、2005年に出た薄い本です。ナンシー・キーファー (Nancy Keefer) という画家がいて、まず彼女が何枚か絵を描き、それにブラウンさんが言葉をつけました。例えばこれが“Asleep” (眠っている)、これは“Awe” (畏れ) というタイトルですね。もちろんブラウンさんは作家として何冊も本を出していますけれども、それと同時に、主にシアトルに住んでいる色んな画家とか、あるいは演劇をやっている人とか、ダンサーとか、そういう人たちと色んな形でコラボレーションをしています。

これはそのひとつの好例ということになります。

その次が *The Last Time I Saw You* (最後にあなたと会ったとき) という、2006 年に
出た短篇集なんですけれども、これはなかなか一言でまとめにくい、恋愛の話もあり、
家族の話もあり、もうほとんど散文詩のような、とにかく言葉のリズムで読ませる、ま
あもともとそういうところがあるわけなんですけれども、そういう点にさらに磨きが掛かっ
ている作品集だと思います。それに加えて、新作は来月でしたっけ？

B—— うん、アメリカでは 6 月。

S—— *American Romances* (アメリカのさまざまなロマンス) というエッセイ集が出
ます。これはアメリカンカルチャーをめぐる多様なエッセイから成っていて、例えばビー
チボーイズのブライアン・ウィルソンの話があると思ったら同じエッセイのなかで 19
世紀の大作家ナサニエル・ホーソーンの話があったり、レズビアン小説の古典と言わ
れている *The Well of Loneliness* (邦題『さびしきの泉』) と『透明人間』の映画版が組み
合わせて論じられていたり、ハイカルチャーとポップカルチャーとのあいだをすごく自
由に行き来しているすばらしいエッセイ集です。これが来月刊ということで、ひとま
ず今までのブラウンさんの仕事をまとめると大体そんな感じになります。もう僕はす
でに喋りすぎましたので、このあとはもちろんブラウンさんにお話いただきます。

B—— ありがとうプロフェッサー・シバタ。そういうふうにとまとめてもらうと、自
分で聞いてもすごいと思っちゃいました(笑)。本を書いたり人前でこうやって話したり
していてだんだん面白くなっていくのは、自分の過去の仕事を振り返って距離を置
いて眺められるようになる、そうすると当時は全然見えなかった色んなことが見えて
くることです。

そういうふうに、過去の自分について発見するというのは今でも起きていて、今朝
だったり、それこそ 5 分前だったりするわけですけど、例えば今朝は毎日新聞の方に
インタビューしていただいたんですけど、彼が私の作品のリストを持っていて、自
作の発表年を間違えないように覗いてたんですけど(笑)、それを見て「あ、そうか」と
思ったのが、最初の長篇、これが最初の本格的出版ということにもなるんですけども、
タイトルが *The Haunted House* ということで、まず「家」がある。家で子供が生まれて、
その次の *The Children's Crusade* で「子供」が出てくる。その次に「女の子」が入って
いるのが 1990 年の *The Terrible Girls* で、その次の *Annie Oakley's Girl* でもやっぱり「女
の子」が入っている。その次は *The Gifts of the Body* ですが、子供が大人になる上での
一番の要素はやはり体が変わっていくことです。そこにいろんな痛みが伴ったり、快

感が伴ったりする、とにかく体を現場にして色々なことが起きていく。こうしてみると、人生をなぞるようにしてタイトルも変わってきているんですね。

もちろんこれは別に図式的にきれいに整理できるという話ではないので、そうはせずに2つ3つタイトルをとばしますが、とばしたあとに出てくるのは「死」の問題です。親と家、という話から自分は始めたけれども、ここに至って親の死ということが出てくる。そしてその次に出てくるのが *The Last Time I Saw You*、ここでも「最後」という言葉が出てきています。この「最後」というのは、自分の希望としては、今までずっと書いてきたロマンチックな愛情とかその苦悩とか、そういうテーマの最後の *gasp*、あえぎであるというふうに思っています。

来月に出る本が *American Romances* というタイトルですよ。いま柴田さんに全作品を紹介してもらってまで気づかなかったんですが、考えてみると今まで書いてきた本も、別の意味でロマンチックなオブセッション(妄執)をずっと書いていた。思春期だったり、もうちょっと歳とったりしているけれど、とにかく烈しい、狂気に近い愛情とその問題のようなことを書いてきたわけです。それがこの次の本では、ロマンスという言葉で全然別の意味で使っています。ひとつの文学伝統としての「ロマンス」です。

S—— イギリス小説はリアリズムでアメリカ小説はロマンスだということは昔からよく言われますが、そういう話ともつながりますね。アメリカでは現実が現実だけじゃ済まなくて、理想や神話との乖離、あるいは重なり合いにおいて現実が問題にされる。今回のエッセイ集にもそういう意識がありますね。

B—— それと、今までの私の作品というのは、やっぱりすごく自分ということにこだわって書いている。英語で言うと *self-obsessed* ですね。自分としてはそれがだんだん、ナンシー・キーファーやミュージシャンのマイケル・カテル (*Michael Katell*) などとコラボレートするようになって、ロマンスという言葉ひとつにしても違う見方ができるようになったんじゃないかと。*American Romances*でも、まあコラボレートとは違いますが、ナサニエル・ホーソーンのような、アメリカのロマンスの伝統を作った大作家から借用したり、ちょっと敬礼を送るようなことをやっている。こういうところでも、孤立したアーティストという感じから、芸術を介して他人ともっとつながれるようになっている気がします。

なんだかこんなふうに言うと、今までの私は自分のことしか頭にない、ほとんど頭がおかしい人間だったように聞こえるかもしれないけど、別にそういうわけではありません(笑)。

『犬たち』について

S——では、『犬たち』という作品についてしばらくお話を伺いたと思います。ある意味でブラウンさんのほかの作品と共通してるところもあるだろうし、それから全然違うところもある一冊だと思うんですね。そのあたりの共通点と相違点について、ご自分ではいかがでしょうか。

B——形の上では継続性というのはあって、『体の贈り物』のそれぞれの章のタイトルはすべて“The Gift of …”「～の贈り物」という形です。それからさっきのナンシー・キーファーと作った本でもタイトルはすべて一単語なんです。同じように『犬たち』でも、目次を見ればわかりますが、(画面で目次が映し出されるが、なかなか焦点が合わない)……うん、この本は幻覚が見えたり、ものがはっきり見えなかったりすることもひとつのテーマ(笑)。あ、見えましたね。このように左側に Dark, Body といった簡単な単語があり、右側には Constancy (貞節) Steadfastness (忠節) とか、抽象的だったり宗教的だったりする言葉が並んでいます。こういう組み立て方は一緒ですね。

もうひとつ、この本も私のほかの本と同じで、ジャンルが定めがたいということがあります。これを長篇小説だと言う人もいるし、長篇なんかじゃないと言う人もいて、いろいろとうるさいわけですが、私としてはひとまず、ちゃんと副題に示したようにこれは bestiary (動物寓話集) だと思っています。Bestiary とは中世にたくさん書かれたジャンルですが、その現代版ですね。とにかく、私の本はどれも、西洋文学の既成の分類法には収まりにくいんです。

たとえば *The Terrible Girls* という本も単に短篇集と見られることがあって、どういう順番で読んでもいいんだと言われると、あれっと思ってしまう。私の編集者は、これは連作短篇だ、だからこの順番で読まなくちゃいけない、と言っていて、私もその見方に賛成です。ある人にインタビューしてもらったときに、褒めたつもりなんでしょうけど、「あなたは自分では気付かずに (unwittingly) 小説というものの形をつくりかえた」と言われて驚きましたね。「気付かずに」って、イディオ・サヴァンじゃないんだし……私、作者なんですけど(笑)。

いずれにせよ、『犬たち』もやはり、出来合いのジャンルに上手く収まりません。同様に、文章にしても、文法的なルールをとるところで破っています。そういうのをいいと言ってくれる人もいますが、「このセンテンス、ズルズル長く続いてるけど、知ってる？」と言われたりもします。まあしょっちゅう言われることですけど。

(足を伸ばしたら机の下から足がはみ出してしまい) あ、気づかずにテーブルを再創

造してるみたいです(笑)。

さらにもうひとつ、ほかの本との共通点ということ言えば、『犬たち』も非常に強烈な情感が込められていて、読み手に多くのことを要求します。けれども、『体の贈り物』から入ってくれた読者の中には——アメリカではそういうことがよくあったし、日本でもあるかもしれません——この本にけっこう動揺させられる人がいるかもしれません。なぜかという、『体の贈り物』もすぐく情に訴える話ですけれども、情の大半は哀しみをめぐるものだし、そこには暴力的な要素はありません。もし暴力があるとしたら、それは人が死んでいくという、死の暴力です。一方、『犬たち』のほうは本当に文字通りの暴力がたくさん出てくるので。

家族についてはいままでも書いてきていて、特に最初の『幽霊屋敷』と『若かった日々』と『家庭の医学』はそうです。『犬たち』には家族が直接は出てこないんですけども、おばあさんが重要な人物として出てきて、この人は私自身の母親とかなり重なっています。私は『犬たち』を母が亡くなったあとに書きました。その本のなかで、女の子がおばあさんを救えない、来たのが遅すぎて救えないという展開になっているのは、やはりおばあさんと自分の母とが重なっているんだろうと思います。

そういう風に考えてみると、今度の *American Romances* では自分の父親が出てきて、一個人として出てくることもあれば、ジョン・ウェインと重なりあったりもします。ジョン・ウェインを通して、アメリカのマッチョ精神とかアメリカの戦争の歴史、第二次大戦だったりキューバ危機だったりするわけですけど、そういうものと私の父親が結びついています。

どの本であれ、読者はまずは感情的、霊的に、心の次元で反応してくれます。そのあとで、もう少し知的に、あるいは芸術的に頭で考えてくれる。最近、エドガー・アラン・ポーの文学論を読みなおしているんですけど、ポーは読者の心のなかにひとつのエフェクト(効果)を生み出すということを強調していて、この考え方には大いに共鳴します。知的な効果というよりも、もっと感情的な、読者が私の本を置いたあとで、体が反応しているような、そういう効果が生じるようにしたいですね。

S——では、『犬たち』という作品から少しバイリンガルで朗読いたします。まず、動物寓話集というジャンルについて少しお話しします。

B——動物寓話集というと、つい中世的なものと言ってしまいがちなんですけど、実際はギリシャまで遡ります。イソップみたいなものを考えていただければいいと思う。この形式は、動物を科学的に描写もするんだけど、それを通して人間にいろんな教訓を伝えるという宗教的目的とも結びついています。伝統的な動物寓話集では一章

一章違う動物が扱われていて、違う教訓を伝えています。ところが、私の動物寓話集はすべて犬についての章で、どの教訓も暗い(笑)。人はどっちにしろつぶされる、どっちにしろ色んな痛みがあり、悲しみがあり、苦しみがある、簡単な抜け道なんかない、そう言っている本です。

まず4章の「骨」という章を読むわけですが、その前にちょっと伺いたいんですが、日本でもマザー・グースのオールド・マザー・ハバードみたいに、食べさせてあげるものがないから自分が食べられちゃう人の話ってありますか。

S—— どうかなあ……すぐには思いつきませんが。

B—— キリスト教の神は慈悲深いから、神に祈れば神は石を与えない、パンをくれるという思いがありますけれども、『犬たち』ではそれを反転させています。「骨」という章のサブタイトルはCharity(慈善)ということになっているんですが、ここでの神は祈っても食べ物を与えるわけではなくて、骨をくれる。骨はもちろん石と同じではありませんが、bone/stoneと韻は踏むし、普通は人間ではなく犬に与えるものですよ。そういうふうに、ここでは神の慈悲というものがうまく機能しない。「お腹が空いているのです、お願いですから何かください」「よろしい、骨をやりよう」……これは慈善じゃありません、邪悪です。もっと一般的に言っても、贈り物は本当に贈り物じゃなかったりするし、これが愛だと人々が言ったりするのが本当は愛じゃなかったりしますよね。

S—— はい、では読みます。

<『犬たち』第4章「骨——慈悲について」を朗読>

B—— これは私の個人的な思い込み、独自の狂気かもしれないし、こういうことが文化を超えてどこまで伝わるのかわかりませんが、けっこう不気味な内容ですが、私にはすごくユーモラスにも思えるのです。そして、犬は骨が欲しいのに、女の子は意地悪でなかなかくれない。上流階級の戯画みたいです。

S—— 犬の方が弱いというのは、この本ではむしろ例外的ですよ。

B—— そうですね。それと、どちらもおぞましい遊びを楽しんでいるところも。実はこの犬はものすごく強いのに、あたかも強くないかのように演じているわけです。

S——では、もう1章読みます。第15章の「女の子、信仰について」という章です。

B——「女の子」というタイトルについて一言。ジェンダースタディーズとか、男と女の関係について人は色々言いますが、もうひとつ私が興味があるのは、girlということ。さっき言ったように、タイトルにgirlという言葉が入っている本も2冊出してるわけですが、girlとはboyに対するものであると同時にwomanに対するものでもある。girlというと可愛らしい存在として肯定的に見られたりしますが、ある意味では一人前でない、小さいものとして低く見られたりもする。実際、今ではあまり言わないですけども、野球が下手だということを言うときに「あいつは女の子みたいな投げ方だ」と言ったりしたものです。

<朗読・『犬たち』第15章>

B——ほかの本との違いという話がさっきありましたけれども、特にこの章が、日本でよく読まれている『体の贈り物』と比べて何が違うかというところ、この語り手の女の子は、とにかく物事をひとつの決まった見方で見ようとしていますよね。すべてがいいんだ、いいことに気持ちを集中させれば何もかもうまく行くんだと思おうとするんですが、そうは行きません。悪いものがどんどん出てきてしまう。

だからある意味でこの章は、物事の良い面と悪い面が見えることがテーマだとも言える。両者のあいだに、緊張関係がある。そういう意味では、表面的には全然違った感触の『体の贈り物』ともそんなに変わりません。『体の贈り物』もやっぱり、エイズ患者を世話している人が、相手を生きた人間として見ようとするわけですが、彼らが死につくあるということもどうしたって意識せざるをえない。自分は威厳をもって生きようとしているけれど、同時に人が死ぬのを助けてもいる。二つのビジョンがツネにあるんです。

ところで、アメリカ児童文学にはポリアンナ(Pollyanna)という重要な人物がいます。で、そこから派生して、何でも肯定的に見ようとするポリアンナ・グラッドというキャラクターがいるんですが、ご存知の方はどのくらいいらっしゃいますか？ あ、結構いますね。サンドイッチが半分しか残っていないときに、「半分も残ってる！」と言ったり、明るく生きましよう、生きる姿勢を変えましよう、っていう、いかにもアメリカ的に空虚な人物です。「雨だねえ」と言われると「雨の中で遊ぶの大好き！」と言ったり……ひっぱたいてやりたくなります(笑)。

この15章のもうひとつ元になっているのは、*Please Don't Eat the Daisies* (邦題『ママは腕まくり』)というTVショーで、キュートで幸せな家族がいて、可愛い犬がいて……私が描く薄っぺらな幸せのイメージの大半は、そういうTVのポップカルチャーか

ら来ています。

この章の女の子は、楽しくなろう、幸せになろうとしても、本物のモデルがないわけですね。だからポリアンナ・グラッドとか『ママは腕まくり』の人たちとか、そういう現実味のない存在を真似するしかない。

アニー・オークリーという映画やミュージカル、とさつきおっしやいでしたが、私にとってはむしろ実在の人物ですね。キット・カーソンとかバッファロー・ビルとかと同じで、歴史上の人物なんです。本当に銃の名手だったんです(笑)。

S—— あ、なるほど。それではこのへんで皆さんからのご質問をお受けします。

質問者1—— 今朗読していただいた「少女」ですが、この少女は自分が安全なんだと頑なに思い込もうとしているせいで、逆に残酷なものを引き寄せてるように思えるんです。こういう世界観はブラウンさんの私的なオブセッションなのか、それともアメリカの女の子がけっこう共有しているものなのでしょうか。

B—— 普遍的なものだと思いますね。この章はこの女の子がこういうふうに見えたと見ながっているというのが一方にあって、でも実は世界はこういうふうに見えているというもう一方の極があるわけですね。これを章全体で考えると、彼女はいつも黒い犬たちに虐げられていて、「こんな人間ほかにいるわけない。こんな気持ち悪いのっておかしい」と思う。で、外に出て、他人とつながりたいと思う。「自分が他の人と同じように見えるんだってことを私は自分に納得させなくちゃ、他の人とそんなに変わらないってことを他の人にも納得してもらわなくちゃ」、そう考えるんです。中は無茶苦茶なのに、外は普通なんだと見せようとする。彼女自身から見て人々はみんなポリアンナみたいに見えるから、自分もポリアンナみたいに見せようとする。

彼女は自分が他人と違っているということを実感してるわけですね。で、自分が違っていることをすごくやましく思っている。そして、人と一緒になりたいと思う。そのためには他人と同じようにふるまえばいいんだと思っているんです。こういうのはすごく普遍的な、誰でも覚えがあることではないでしょうか。つまり、自分以外の人はみんなどう振舞ったらいいかをわかっているように見えて、自分だけがわかっていない、だからわかっているようなふりしなくちゃ、とってしまうんです。

質問者2—— 『体の贈り物』を読ませていただいてからファンになりました。今日は本当にありがとうございます。私は大学院で哲学と思想を勉強しているんですけど、私が『体の贈り物』を知ったのは、先輩が『体の贈り物』をデリダの贈与理論を使って分

析するという卒論を書いていたのがきっかけでした。

B—— Oh, interesting!

質問者 2—— 贈与というと、レヴィ=ストロース的な贈与を私たちは考えがちで、送られたら送り返すという感じなんですけれども、『体の贈り物』を読むと、そういう贈与ではなくて、そもそも本当に「贈り物」なのかと考えさせるようなお話がいくつもあって、そういうことに焦点を当てて先輩は書いてらしたんですけど、レベッカさんは思想家たちの思想、ここで言えばデリダですが、そういうものを引用したりそういうものに影響されたりということはあるのでしょうか。

B—— デリダのことを「よく知ってます」と言えたらいいんですけど、知ってるのは名前だけです。頭のいいフランス人だということは知っていますけど(笑)。20世紀の思想はほとんど読んでいないので、この本の「贈り物」という概念も自分の経験に基づくものと、あとは聖書ですね。パウロが「コリント前書」で“the gift of the spirit”(霊の賜物、贈り物)ということを書いていて、私はそれに対して、霊的なものより肉体的な、いま=ここにあるものの方がしっくり来るので、「体の贈り物」だというわけです。

贈与の思想ということで言えば、ルイス・ハイドの本にはすごく惹かれます。彼が言うには、贈り物というのは止まってしまっただけで贈り物にならなくて、どんどん循環して人から人へと巡って行かなければならない。私にとっては芸術というのもそうであって、どこかに定まった到達点があるのではなくて、人の間をぐるぐる廻っていくものだと思います。よかったら、ルイス・ハイドはぜひ読んでみてください(Lewis Hyde, *The Gift: Imagination and the Erotic Life of Property*, 邦訳『ギフト——エロスの交易』)。

質問者 2—— ありがとうございます。

質問者 3—— 『犬たち』のサブタイトルについてお聞きしたいんですが、慈善や信仰といったサブタイトルは書く前に思い浮かんでそれについて書かれたのか、それともまず話を思い描いて、書いていくうちにサブタイトルが出てきたのでしょうか。

B—— 動物寓話集という形式になったのがそもそも執筆過程の最後のほうで、犬の話ということではずっと書いていましたけど、形式はずっとあとになってから出てきました。

S—— このあいだ別のところで何ったのですが、これはもともとロードノベルとして始まったと……すごく驚きました。

B—— 犬たちと砂漠をバスで旅するといった話が何百ページもあったんですが、結局それは最後のほうの1章、5ページだけにしか残っていません。そういう書き方は私にとって珍しくなくて、書いて書いて書いて、その大半は捨ててしまいます。だから最初に何百ページも書いたのも、時間を無駄にしたと思うんじゃないくて、その間トレーニングを積んでレースに備えていたんだと考えるようにしています。

質問者4—— こんにちは。私は一時、ゲイ・レズビアン文学を集中して読んだ時期があったんですが、そういう立場で小説を書くときにレベッカさんが読者について気をつけてらっしゃることとか、どういう思想を持って書いてるとかということはありませんか。

B—— 今は特にそういうことはありません。ただ、80年代にはそれが少し問題になりました。最初の本が出たのが84年ですよ。ということは25年前です。ゲイ・レズビアン史のなかで25年というのはほとんど永遠のように長い時間で、以来何もかもが変わりました。当時は、レズビアン作家はレズビアンについて肯定的なことを書かなきゃいけないという使命感がものすごく強かった。私はそういうことを書く気はなくて、読んでる人間を不安にするような暴力的で見慣れないものを書いていました。

例えばレズビアン文学史みたいなことを考えると、さつきもちょっと名前が出ましたが、ラドクリフ・ホールというペンネームで書かれた『さびしさの泉』という1928年の作品があって、レズビアン文学の古典と言われてるんですけど、ずっと前に読んだときは、文章も気まずいくらいひどいし、こんなふうには絶対書きたくないと思いました。でもいまは、そういうものの歴史的な意義がわかるようになりました。その一方で、ジュナ・バーンズ(日本での表記はデューナ)の『夜の樹』という傑作がありますけれども、ああいうのは、読む人間の心を不安にするような、暗くて、不気味な作品で、すごくいいと思いました。バーンズはT. S. エリオットともお友達だったし(笑)。「夜の樹」は彼女の女性の恋人との関係から生まれてきた本ですが、彼女は自分がレズビアンと呼ばれることを好まなかった。このあたり、色んな意味でのマイノリティ作家は厄介ですね。メインストリームに属したいと思ったり思わなかったり、自分たちの小さなグループに同一化したいと思ったり思わなかったり。

質問者5—— 私は言語学者なので表現についてお訊ねします。あなたがどこかの講演でお使いになった、“As fresh as a Kansas girl”(カンザスの女の子みたいにみずみず

しい)というフレーズは、どういう意味でしょうか。田舎臭い、ということですか。

B—— せっかくの機会ですから、歌は下手ですがアメリカのポピュラーソングを歌います。カンザスというのはアメリカのハートランド(中核地域)と見られていて、小麦とトウモロコシを作っていて、無垢で善良な人がいて……というイメージです。『オズの魔法使い』の舞台でもありますよね。で、『オクラホマ』というミュージカルの挿入歌にこんな一節があります——

(歌う)

♪ I'm as corny as Kansas in August
high as a flag on the Fourth of July
Dalala…

I'm in love with a wonderful guy

(私は8月のカンザスみたいに田舎臭い
独立記念日の旗みたいに高く
ダララ……

素敵なお男に恋してるの)

いや、これ、『オクラホマ』じゃないですね。どなたかご存じですか？ あ、『南太平洋』？ まさにアメリカ人が世界のこちら側をどう見ていたかがテーマのミュージカルですね。まあとにかく、カンザスはダサいけど素朴でハッピー、みたいなイメージはアメリカの自己神話の一部をなしているんです。ご質問ありがとうございました。『南太平洋』だと教えてくれた方もありがとうございます。

S—— では最後に、『若かった日々』の最初に出てくる“Heaven”(天国)というごく短い作品を読んで終わりにしたいと思います。

<「天国」朗読>

S—— どうもありがとうございました。

B—— Thank you. Thank you for listening. Thank you, Professor Shibata. Arigatou.